

警^け

固^こ

衆^{しゅう}



瀬戸の内海では、珍しく、このあたりは遙か水平線が視界の先に伸び、紀州や伊勢の海にも似た光景を見せていた。

淡路の島影の上空には、濃い群青の夏空に真綿のように光沢を見せている雲が浮かび、家島諸島の沖合を、景弘たちの船はゆっくりとした船足で進んでいた。

景弘は、この日、清盛の命を受けて、小鷲丸と共に都をあとに播磨灘へ船出していた。

船は、小さくとも、兵船であった。

住吉の湊で仕立てた船は、僅かばかりの漕ぎ手と瀬戸の内海に通暁した大野の赤人を船頭にした十余人の手勢を率いていた。

「何れも、屈強な命知らず…」

赤人が、そう告げたとおり、清盛の警護を仰せ付けられている侍たちではあったが、平忠盛が内海にはびこる海賊たちを追討した海の合戦でも勇名を馳せた剛の者も加わっていた。

「播磨の海は、大きい…」

と、景弘が嘆じたとおり、家島諸島と淡路島の間横たう巨大な海域は、海の幸を約束する豊饒の海であった。

「明石の鯛は、この国一の美味…」

播州の漁師あがりの下士の一人は、海峡を歩き来して育つ明石の鯛は家島あたりの車海老を食べて逞しく成長する…という。

「明石の鯛が、桜色をしているわけは、あの車海老を餌にしているせい…」

その逞しさは、播州人にも共通しているという。

景弘が率いる手勢の半分は、播磨の漁師あがりの武装集団だった者で、忠盛の配下となった者だった。播磨は、海も大きい、畿内に近い沿岸部の荘園の収穫高や貢租高は他国に抜きんでおり、国守や郡・郷の司の実入りも大きい……

といわれた。

「しかし、いいなりにならぬは、西播磨人……」

大野の赤人は、景弘に、そう密かに告げていた。

瀬戸内海航路の安全は、特に宋船の往来にとって欠かせぬ重要課題であった。

「先の殿の並々ならぬご苦心……」

容易に御門や摂関家の意のままにならぬ西播磨の豪族や土賊・海賊の中には、叛意を明らかに平忠盛らの追討を逃れて、行方を晦ますものもいた。

忠盛は、徒に争うことを好まず、無駄な血を流すことを嫌った。

「合戦より先に、まず談合を……」

こうした忠盛の戦への姿勢は、数度の海賊追討に加わった佐伯頼信にも、教訓となって景弘に伝わっていった。

父頼信が、佐伯軍団の長として、安芸地方に君臨できた理由には、武人であると同時に嚴島神社の神官としての人徳や穏やかさに加え、「自分たちの所領を共に力を合わせて守る」という認識を互いが共有し

ていたことで、要らざる衝突を避けてきたことがあった。

「穏やかな風貌に現れたとおり、極力争いを避ける、父の束ねの力：それが、安芸地方に永年の安定をもたらしている」

景弘は、清盛から命じられている瀬戸の内海の警固衆けしこしゅうを束ねるために、こうした忠盛や父の教訓を生かしたいと考えていた。

清盛に命じられた景弘が、淡路や阿波・讃岐の海賊退治に赴いたのは、平治の乱の直後のことだった。「あの合戦の折は、若とのの肝の太さに、改めて得心がいき申した」

そう述懐したのは、小鷲丸であった。

「幼い頃は、ひ弱く、すぐ熱が出る童子であった若とのが、今は剛勇を誇るもののふに成長されている：」都から逃げていった源氏の侍や謀反ふみに与した残党たちは、海を渡って逃亡していた。それに手を貸した者に、平忠盛に懲らしめられた海賊たちの生き残りがいた。

「追い詰めては、かえって手負いとなった海賊たちは、死に物狂いで抵抗する」

まずは、我に味方せよ：と伝え、それに従わねば、是非もなし。

「その時は、敵の大将たる者に肉薄して、首を申し受けようぞ」

景弘の行動は素早かった。

「物見を走らせ、敵の動きを把握せよ」

その役目を、小鷲丸と鞍馬からやってきた山の修験者たちが協力していた。紀州の山や熊野の海辺での彼らの情報網は、海を越えた淡路や阿波にも及び、その息のかかった修行者たちが在家して土着していた。

「鞍馬の西行どのお手引き…」

後の世に、「高野聖」という空海の教えを広めた僧集団がいた。彼らは、弘法大師の奇蹟を説いて全国を行脚したが、そうした高野僧こそ、景弘に情報をもたらし、鎮撫のための協力を惜しなかつた徒であつた。

「淡路の西は阿波や讃岐と共に播磨灘を囲む、かつては彼ら海賊たちの本拠地…」

景弘は、屈強の侍の小集団を従え、素早く果敢に、隠れ潜む敵に肉薄していった。

そして、逃げ道をあげ、その先に軍勢を待機させた大型船を配置していった。

「あの大型船の軍勢を目にした者は、たちまち従属の意を表したもののじゃ」

播磨と備前の国境には、低い山並みが連続と続き、その境は、沿岸にあつても小さな島が迷路のような水路をつくつていた。

「今夜は、室津泊まり…」

室津は西播磨の風待ち潮待ちの湊として太宰府との交易船も沖に停泊した。

その交易船を密かに襲おうとしてゐる賊がいるという噂があつた。

播磨と備前の国境、ひろい播磨灘の海域が尽きるあたりに、船の行く手を阻むように日生の島嶼があり、鹿久居島と呼ばれた。頭島、大多府島、鴻島は、自然の要害。備前の海域には片上、牛窓といった潮待ち風待ちの湊があり、古くからこの辺りは剽悍な賊の根拠地でもあつた。

小さな島の間は、複雑な潮の流れがあつて、干満の度に潮の流れは逆流し、その流れを味方に賊は自在

に船を操り、都との航路を往来する船の荷を掠め取ろうと狙った。

「景弘さま。手はずどおり、オウの長を案内して参りました」

そう景弘に報告してきたのは、船が着く前に行く手の様子を探りに出かけていた小鷲丸であつた。

「オウ」というのは、那波の湊がある湾の名で、相生と呼ぶ浦里の小高い丘には北野神社が祀られていた。この播磨灘から備前の海だけでなく伊予灘や西海までの広い海域を自らの版図とした藤原純友も、この「オウ」の衆には挺摺つていた。

「彼らは、備前物で武装しておる」

というとおり、景弘や小鷲丸が腰に差しているのと同じ短い剛刀を帯びていた。

「船上の合戦に、恐ろしい力を示すと、いわれた。」

「オウの長は、この辺りの賊どもを従えており申す」

景弘は、小鷲丸から報告を受けると、短い間、思案顔でいた。

「潮田の吉衛と申しまする」

景弘の前に額ずいた大男は、そう名乗つて顔をあげた。

「平清盛どのが警固の衆である佐伯景弘と申す」

室津の湊の船宿で、景弘は、オウの長という初老の男に対面していた。

白髪混じりの頭に烏帽子を被つた眼光鋭い西播磨人の、「黒檀のような……」真つ黒に日に焼けた、がっ

しりとした骨太の長軀ちようくに、景弘は海の男特有の精悍せいこんさを感じた。

吉衛が本拠を構える相生でなく、隣の室津むいなとの湊みなとに会見場所を設けたのは、小鷲丸だった。

吉衛は、真正面から景弘を見つめた。

「何と、この眼差まなざしの明るさよ…」

吉衛は後に、そう思ったことを明かした。

「この室津むいなとにも、旨い魚が多く、今宵こよいは、ゆるりとお過ごしいただきますよう」

吉衛は、景弘にそう告げた。

室津むいなとの湊みなとの西には、長い浜が続き、松林に潮風が吹きつけていた。

「この辺りは、もう何年も戦はありませぬ」

吉衛は、そういつて微笑ほほえんだ。

「この度は、清盛さまが播磨守にご任官遊ばされ、まことに祝着至極。佐伯さまにお立ち寄りいただきましたのは、この西播磨から備前の海を安んじ申し上げる警固の衆に、われら一族もお加えいただきたく、お願い申し上げます次第にござりまする」

「保元の乱」において、戦功のあつた清盛は播磨守の位を与えられていた。

「院も御門も、頼みとするは武人…」

こうした言葉が、公家や都人の間で交わされていた。

西国の一地方官である景弘が、中央の清盛との絆を深める姿を見て、在地領主たちは、いち早くこぞ自分の支配地を安堵させるため、郡司の佐伯家に所領を寄進して、自らの身を託そうとしていた。こうした在地領主らの動きは、清盛に大きな力を与えることに結びついていった。

「佐伯さまの兵船には、いざ合戦に備えて弓矢楯を備え、戦さ慣れた兵が乗り組んでおりますが、わが船には、そのような物騒なものは乗り込まず、今宵の席に、花を添える舞姫を連れ来ております」

吉衛は、酒宴の準備にかかる宿の座敷で、そう景弘に宣した。

景弘が率いた兵船には、吉衛が指摘したとおり、弓矢楯で武装し、早瀬を乗り切る漕ぎ手は、楯の合間から櫓櫓を操り、短いが強い弓を引く兵は、敵の船に併走する形で相手を射竦めた。そして大野の赤人が鯨捕り戦術を取り入れた兵法で舷側を寄せる一方、鉤縄を投げ、潮の流れを利用して相手の船を自在に操った。小鷲丸が率いる船上の白兵戦で力を揮う兵たちは、背に負った刀を敵船に乗り移りざま抜刀し、切りつけて海に落とした。

淡路や播磨だけでなく讃岐や備後の島嶼部に屯する船侍の集団にとって、景弘の勇猛ぶりと海上の合戦の巧みさは、既にひろく知られていた。

「佐伯さまの兵船には、われらは、ようお相手できませぬ」

吉衛は、そう告げて屈託なく笑った。

「戦わず、勝ちを手に入れる……」

景弘は、それは、父親譲りの合戦の極意だと、考えていた。

景弘の警固衆としての働きは、この内海の船人たちは知らぬ者はいなかった。「手を組むことで、より大きな利を得る」それを、景弘は合戦の目的とした。

景弘が、自分の兵船を駆つて讃岐の島嶼とうしょや伊予灘や塩飽しわくの島々の船侍たちを新たに瀬戸内の警固衆に組み入れたのは、オウの長おさである潮田の吉衛の助力によるものであった。

吉衛の美しい娘二人は、後に京に上り、芙蓉ふようの許もとに身を寄せ、仁和寺にんなじの庵いおりで内侍修行ないしに励んだ。